

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284113

研究課題名(和文) 東インド会社解散と出島商館の変容：史料構造からみる近世日蘭関係史料の研究

研究課題名(英文) The dissolution of the Dutch East India Company and the transformation of the Deshima factory: A study of historical documents concerning the relationship between Japan and the Netherlands

研究代表者

松井 洋子 (MATSUI, Yoko)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：00181686

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、以下の4点を中心に、オランダ東インド会社の解散前後、18世紀末から19世紀初めの転換期の日蘭関係史料群の構造とその変化を検討した。出島商館文書の内19世紀に作成されるようになった報告書の性格を検討し、1834年から1842年分の翻刻により当該期の貿易業務の概要を示した。商館と日本側機関の往復文書の年次リストを作成した。オランダ貿易会社文書を撮影し、日本関係史料の全体を概観できる目録を作成した。また、出島代理店の営業報告書を翻刻し、白蠟輸出の実態を解明した。中立国備船期に関わるピーボディ・エセックス博物館所蔵文書の撮影と翻刻を行なった。

研究成果の概要(英文)：We have studied the structure of the documents concerning the relationship between Japan and the Netherlands, focusing on the change around the time of the dissolution of the Dutch East India Company (1799). We mainly examined the source materials as follows:

1) We made transcriptions of the Verslagen (the annual reports of the Deshima factory beginning in the 19th century) from 1834 to 1842, to grasp the outline of the yearly trade. 2) We made lists of the correspondence between the chief factor and the Japanese authorities. 3) We photographed the documents of the Nederlandsche Handel-Maatschappij concerning Japan and made a detailed catalogue. We transcribed the annual business reports of the Deshima Agentschap (branch office), and revealed the process of the trade in white wax. 4) We photographed the documents, held in the Peabody Essex Museum, concerning the period of chartering neutral vessels during the time of the Napoleonic war, and transcribed one of the ship's journals.

研究分野：人文学

キーワード：史料学 日蘭関係史料 東インド会社 出島商館 オランダ貿易会社 中立国備船 王立珍品陳列室

1. 研究開始当初の背景

近世日蘭関係については、江戸幕府の対外政策、貿易取引額や輸出入品とその変遷、オランダ東インド会社(以下VOC)のアジア域内交易、日蘭双方の情報の蒐集と伝達、出島と関わる長崎の地域社会、通訳者である通詞の存在形態、蘭学の成立と発展、異国趣味の美術など、多様な視点から多くの研究がなされてきた。オランダ国立中央文書館(以下NA)に所蔵される豊富なオランダ語史料がそれらの研究を支えてきた。

しかし、膨大な史料の中で、用いられてきたのは、日記、一部の書翰、「一般政務報告書」、仕訳帳、元帳、送状など限られた種類の史料がほとんどである。また、オランダ語史料と日本語史料の相互関係の検討も十分に行なわれていない。膨大かつ多様な文書を適切に選択して利用することができれば、研究の幅は広がるはずであり、また翻刻・翻訳が多く蓄積されれば、日本史研究にさらに広範にオランダ語史料を活用することが可能になる。

VOCは1799年に解散する。会社の最末期から解散後、フランス革命・ナポレオン戦争の影響を受け、オランダのアジアにおける拠点バタフィアでは、日本へ送る船体を確保することができず、1797年から1807年の間はアメリカ・デンマーク等の中立国の傭船が長崎に送られ、1810年から16年はオランダ船の来航は途絶した。一方オランダ共和国はナポレオン軍によって占領され、1815年オランダ王国として独立を回復するが、この激動の中で、オランダ本国においてもバタフィアの東インド政庁においても、文書の作成・伝達・保存の状況は大きく変わる。

日本国内では18世紀後半、日蘭貿易は不振が継続し、最終的には1790年寛政の貿易半減令に至る。一方で異国船の出没等周辺海域の状況変化の中で、出島のオランダ商館の存在は新たな政治的意味を持ち始める。日蘭関係史研究の中でもこの時期の重要性は指摘されてきたが、貿易の実態、商館の役割や構造、その変化の有無についての実証的検討はほとんど行なわれていない。この転換期についての研究を進展させるためには、基盤となる史料情報の整備が必要と考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、VOCの解散前後、18世紀末から19世紀初めの転換期を中心に、(1)VOC時代とその解散後を対比しつつ日蘭関係史料群の構造とその変化を検討すること、(2)日蘭関係に関する情報を含みながら性格が不明確だった多様な文書の史料学的検討を行なうこと、(3)文書構造の検討を通じて、近世の日蘭関係における出島商館の存在形態とその変容を考察すること、(4)検討による知見を目録情報・翻刻・翻訳などの形で公開し、研究資源化を進めること、を目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、18世紀末から19世紀初めの転換期を中心に、VOC時代については18世紀後半から、会社解散後については19世紀半ばまでの時期について、主に以下の文書群を対象とし、当該史料の明細目録の作成、主要文書の翻刻等を行ないつつ、文書群としての性格、個別文書の位置づけ等を検討した。A 出島商館の文書 (NA所蔵 日本商館文書 (1.04.21) 以下NFJ)

出島商館文書のうち、次の2点を中心に、検討を進めた。

- (1) 報告書 Verslag の翻刻と要約
- (2) 出島商館と日本側機関の往復文書
B 他機関文書・個人文書
- (1) ピーボディ・エセックス博物館所蔵文書
- (2) オランダ貿易会社日本貿易関係文書
- (3) その他

4. 研究成果

A 出島商館の文書

- (1) 1834年から1842年の報告書の翻刻と要約

19世紀出島商館においては、1817年以降新たに作成が開始されることになった報告書 Verslag が、以後バタフィアへ送付する報告の中核となる。「商館長日記」が欠落している1834年から1842年の期間における商館の動向を知る基礎史料となる当該期の報告書に着目し、その翻刻を行ない、要約または見出しを付した。これにより、各年の出島商館の業務の概要の把握が可能となった。

- (2) 出島商館と日本側機関の往復文書の全体把握 (ca. 1750~1830)

出島商館と長崎奉行・町年寄・長崎会所などの日本側との往復文書について、各年の文書がどれだけ、どのような形で残存しているかの基礎的情報を整理した。すでに『日本関係海外史料目録』に一点目録として採録されている各文書について、画像で確認し、情報を拡充し、18世紀後半から19世紀前半について、年次ごとに一覧できる形にした。

- (3) 上記の作業を中心に、出島商館に保存された文書の構造について考察した。

VOC時代の基幹的な商館文書としては、「長崎商館取引帳簿」、「〔船荷〕送状控簿」、「商館員給与簿」、「商館日記」、「発信及び受信書翰簿」、「判決・決議録」、「訓令控簿」、「諸経費の明細帳類」、「江戸参府経費及び贈物の覚書」などの簿冊が挙げられる。これらのうち、「日記」、「受信書翰簿」、「送状控簿」は、会社解散後もほぼ同じ名称で作成され続けることが確認できる。ただし、「日記」における附属文書の有無、「受信書翰簿」に記載される書翰の種類は、時期によって変化する。「日記」は複数冊写され、少なくとも1820年代の終わりまで、一冊はバタフィアへ送られ続ける。「訓令控簿」に類する簿冊は継続的に記録される場合と、ある時点で有効な命令が整理される場合があるが、いずれも1820年代以降には存在しない。かわりに、関連す

る政庁の決議の抜粋 Extract が何十通も送付され「受信書翰簿」に蓄積される。

一方、オランダ東インド会社時代には会計の基幹帳簿とされバタフィアへ送付され点検されていた仕訳帳 *Negotie Journaal*・元帳 *Negotie Grootboek* については、1808 年以降のものは残存していない。1817 年に定期派船による貿易が復活したあと、出島商館文書中の取引に関する諸帳簿の状況は、大きく変化する。その中で中心となるのはおそらく、*Comps.* と *Kambang* (*Cambang*) に分けて作られる、当座勘定簿 *Rekening-courant* であろう。1820 年代を通して次第に形が整い、前述の *Verslag* を見ると、1830 年代には毎年、会計帳簿類 *negotieboeken* として *Comps. rekening* と *Kambang rekening* の二つの会計が締められ、一般会計局 *Algemeene Rekenkamer* に送付されていることがわかる。

人事・給与に関する簿冊は、会社時代の *Logie /Soldij boek* から、政庁職員としての給与簿 *Tractement* という書式に変わる。

簿冊類の変化は同時発生ではなく、会社解散後 1820 年代にいたる出島の組織構造の踏行的変化が反映しているものと推測される。

B 他機関文書・個人文書

(1) ピーボディ・エセックス博物館所蔵文書

オランダ東インド会社解散前後の 1797 年から 1807 年の間、フランス革命に始まるヨーロッパの変動の中で、オランダはバタフィアから長崎へ定期船を送ることができず、アメリカ等の中立国の船と傭船契約を結び、かろうじて出島との接触を保っていた。この時期に日本に来たアメリカ国籍の傭船八隻のうち、*フランクリン号* (1798 年)、*マサチューセッツ号* (1800 年)、*マーガレット号* (1801 年) に関する史料、及びに日本への航海に関わった *ジェームズ・デヴロー*、*サミュエル・ガードナー・ダービー*、*ウィリアムとジョージのクリーブランド兄弟等* に関連する史料が、これらの船の人々が持ち帰った日本産品とともに、同博物館に所蔵されている。

2015 年度に、同館のフィリップス図書館において調査・撮影を行ない、同館所蔵の中立国傭船期日本関係史料の概要を把握することができた。調査したのは以下の史料である。

フランクリン号 及び同船船長 *デヴロー* の関係史料。

マリ・ソサエティ 所蔵航海日誌のうち、*フランクリン号* の航海日誌

マーガレット号 及び同船船長 *ダービー* の関係史料 (傭船契約関係書類)

マサチューセッツ号 航海日誌 (書記 *ウィリアム・クリーブランド* による)

マーガレット号 航海日誌 (書記 *ジョージ・クリーブランド* による)

マーガレット号 書記として来日した *ジョージ・クリーブランド* の後日の回想記。

エセックス・インスティテュート 刊行の、地域の歴史に関わる史料情報の雑誌

当該期のセーラムと日本の関係についての研究論文

上記の中から、 の日誌 (1799-1800) の翻刻を行ない、その内容を検討した。

(2) オランダ貿易会社日本貿易関係文書

1824 年に設立されたオランダ貿易会社 (以下 *NHM*) が日本貿易に直接携わったのは 1827 年のみであり、以後はバタフィアにおける貿易品の調達等日本貿易に間接的関わりを持ち続けていた。同社が再び日本貿易に手を出すのはいわゆる本方貿易が廃止された日蘭追加条約以降のことである。*NA* 所蔵の *NHM* 文書の一部については 1980 年代に史料編纂所がマイクロフィルム複製の収集を試みたが、*NA* による目録の編成替え (1998 年版目録) 以前のため、まとまって存在する駐日代理店文書を中心とする収集にとどまった。本研究では、今後 *NHM* 文書を日蘭関係史研究に活用するための基礎的作業として以下のことを行なった。

NA による新たな目録編成 (1998 年版、2013 年増訂版) に基づき、マイクロフィルムによる既蒐集部分と、未蒐集部分を確認し、*NHM* 本社工書に含まれる日本関係文書の全体像を概観でき、史料編纂所で利用可能な複製マイクロフィルムの架番号・コマ番号を検索できる記述目録を作成した。

1828 年に作成された日本貿易の状況に関する報告書を検討した。併せて 1820 年代後半 (*NHM* 創立当初)、1840 年代前半 (南京条約前後)、1850 年代末 (パウリング条約前後) 以降のアジア各地 (中国、マニラ、バンコク、日本、サンフランシスコ) の状況についての報告書 (*NHM5275* 以下) を画像で入手した。

NHM 本社工書のうち、高島炭鉱、開陽丸、グラバー商会、嶋田組などに関わる未撮影文書の調査・撮影を行なった。

1857 年以降については、基幹となる史料である出島代理店 *het Agentschap te Desima* の 1857 年～1874 年次の「営業報告書」の翻刻を行なった。なお、これにあわせ、オランダ植民省および外務省横浜総領事館文書に受信と発信控えが対応して存在する、長崎駐在オランダ総領事の月例報告 (主として 1860 年未翻訳分) の訳出をおこなった。

NHM による白蠟の輸出に焦点を当て、*NFJ* 文書と合わせて検討することにより、*NHM* の経営戦略の分析を行ない、また関連する長崎歴史文化博物館所蔵の白蠟輸出関係史料についても調査した。

(3) その他

オランダ国立中央文書館所蔵の *プロムホフ* 家文書の追加分の調査を行なった。

オランダ国立北ホランド州文書館所蔵文書のうち、476 *アムステルダム* 国立博物館及びその前身となる機関、という分類の文書群の中に含まれる、1816 年設立の王立珍品陳列室のための日本の物品の蒐集に関わる文書を調査した。1820 年代前後に *プロムホフ*、*シ*

ーボルト、フィッセルらによって行なわれた日本に関する物品の蒐集に関する史料は、日本商館文書中にはあまり見られず、この博物館関係の文書はそれを補完する性格を持つ。

多様な史料を扱うことを当初よりの計画としたため、個々の史料を用いた分析については、今後の課題とすべき点が多いが、新たな史料の紹介、翻刻等の形でオランダ語史料・英語史料の研究資源としての蓄積を進めることができた。調査を許された関係機関に謝意を表したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16 件)

横山伊徳「オランダ総領事デ・ウィット月例報告一八六〇年-一八六三年(一)」、『東京大学史料編纂所紀要』27 巻、査読なし、2017、47-67

横山伊徳「日本開港とロウ貿易 オランダ貿易会社を例に」、『講座明治維新七 明治維新と外交』7 巻、査読なし、印刷中

松井洋子「近世日本を語った異国人たち：シーボルトの位置」、『人間文化』26 巻、査読なし、2017、37-48

松井洋子「シーボルトに関する史料」、『歴史と地理 日本史の研究』255 巻、査読なし、2016、25-31

横山伊徳「オランダ貿易会社本社文書内日本関係文書記述目録(仮)」、『東京大学史料編纂所研究紀要』26 号、査読なし、2016、19-49

松井洋子「シーボルトの勘定帳：出島における経済活動を探る」、国際シンポジウム「シーボルトが紹介したかった日本 欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために」報告書、査読なし、2015、147-156、(英文 327-336)

MATSUI, Yoko “The Debt-Servitude of Prostitutes in Japan during the Edo Period, 1600-1868” (Gwyn Campbell, Alessandro Stanziani (eds.) *Bonded Labour and Debt in the Indian Ocean World*, 査読なし、2013、173-185

MATSUI, Yoko “The Factory and the People of Nagasaki: Otona, Tok, Comprador” *Itinerario*, Vol.32-3, 査読なし、2013、139-152

横山 伊徳「幕末におけるオランダ貿易会社と下関戦争」、『山口県史の窓』幕末維新 7、査読なし、2014、1-4

[学会発表](計 14 件)

松方冬子「国書と疑似臣民 『海禁・日本型華夷秩序論』を批判する」、『洋学史学会 25 周年記念大会、2016 年 5 月 7 日、電気通信大学(東京都 調布市)

MATSUKATA, Fuyuko, “Countries for Commercial Relations (Tsusho-no-Kuni 通商

国):The Tokugawa Struggle to Control the Chinese in Japan,” Conference: Maritime Worlds around the China Seas: Emporiums, Connections and Dynamics, 31 August 2016, Taipei(Taiwan)

YOKOYAMA, Yoshinori, “The Changes of Early Modern Japan and the Pacific Ocean,” WEHC2015, Merchants, Migrants, and Slaves in the Development of a Pacific Ocean World, 2015 年 8 月 4 日、京都国際会館(京都市 京都府)

横山伊徳「太平洋世界と近世日本の変容」、『日本的鎖國與開國』国際學術研討会、2015 年 6 月 27 日、台北市(台湾)

松井洋子「蘭学と日本学 オランダ商館が仲介した書物と情報」、『東洋文庫アジア資料学研究シリーズ二〇一四年度西洋古典籍書誌講習会「西洋書籍と東洋研究」東洋における西洋書籍』、2014 年 10 月 4 日、東洋文庫(東京都 文京区)

松方冬子「オランダ風説書 - 1641 ~ 1859 年 -」、『デイドロ大学講演、2014 年 3 月 11 日、パリ(フランス)

MATSUI, Yoko, “Siebold, the merchant: Private Trade at the Dutch Factory in Japan in the 1820’s,” The Seventh International Siebold Collection Conference, 2013 年 10 月 18 日、ライデン(オランダ)

MATSUI, Yoko, “Nagasaki: The social structure of a trading port in early modern Japan,” *Maritime East Asia in the Light of History, 16th-18th Centuries. Sources, Archives, Researches: Present Results and Future Perspectives*, 2013 年 10 月 2 日、ナポリ(イタリア)

[図書](計 3 件)

松井洋子・横山伊徳・松方冬子・西澤美穂子他『東インド会社解散と出島商館文書の変容』東京大学史料編纂所、2017、544 頁(松井 1-36・195-301、西澤 37-191、松方 305-338、横山 341-544)

松井洋子・マティ・フォラー編『ライデン国立民族学博物館蔵プロムホフ蒐集目録 - プロムホフの見せたかった日本』臨川書店、2016、324 頁

松方冬子編『日蘭関係史をよみとく(上) つなぐ人々』臨川書店、2015、336 頁

[産業財産権]

該当なし

[その他]

東京大学史料編纂所 / 横山伊徳ホームページ / 科学研究費 / 松井科研(横山担当分) <http://vibrant.air-nifty.com/nota/>

(<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/yokoyama/kaken/index.html> からリンク)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 洋子 (MATSUI, Yoko)
東京大学・史料編纂所・教授
研究者番号：00181686

(2) 研究分担者

横山 伊徳 (YOKOYAMA, Yoshinori)
東京大学・史料編纂所・教授
研究者番号：90143536

松方 冬子 (MATSUKATA, Fuyuko)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：80251479

(3) 連携研究者

木村直樹 (KIMURA, Naoki)
長崎大学・多文化社会学部・教授
研究者番号：40323662

石田千尋 (ISHIDA, Chihiro)
鶴見大学・文学部・教授
研究者番号：00192485

(4) 研究協力者

西澤美穂子 (NISHIZAWA, Mihoko)
矢田純子 (YADA, Junko)
吉村雅美 (YOSHIMURA, Masami)
阿曾 歩 (ASO, Ayumi)
橋本慎吾 (HASHIMOTO, Shingo)
イサベル・田中・ファンダーレン
(TANAKA-VAN DALEN, Isbel)
レイニアー・H・ヘスリンク (HESSELINK,
Reinier, H.)